

New RNA ラボ@富山：立ち上げ雑感

井川 善也 (富山大学大学院理工学研究部
(理学系化学専攻))

会報編集監事の中川さんから「転任とラボ立ち上げの近況を書いてください」との依頼でしたが、さて何を書けばいいのやら。

10月1日付で、9年間お世話になった九州大学工学研究院から富山へ教授として転任しました。ですが年度途中の転任ですので新任地での学生はまだいませんし、九州大の院生や設備の移動も年度末まで待たねばなりません。さらに学科の事情で春まで教員の個室(教授室)に空きがないため、以前は有機合成化学の実験室だった(春からはメイン実験スペースになる予定の)大部屋の片隅で長机を仮のデスクに、転任早々の科研費申請を皮切りにデスクワークをこなしている状態です。広い実験室に私一人だけなのでスペースは存分にあり、整頓の苦手な私には居心地の悪くない住環境なのですが。

思えば9年前の秋も、助教授として加わった九州大の講座は有機化学のラボでした。キャンパス移転前の古い(実験者のいない)実験室を居室に、年期の入った実験台の傍らでの最初のデスクワークも同じく科研費の申請でした(当時の特定領域「RNA時空間ネットワーク」には大変お世話になりました)。

今回着任した講座は「生体機能化学」という分野名ですが、無機化学分野の教授退官に伴う人事となり、学科としては従来なかった分野のラボの新設となります(つまりポストは無機化学から、スペースは有機化学から分野換えした訳です)。ですから研究室としては、人も設備も共にゼロからのスタートです。現在、ラボスペースのレイアウトと物品のセットアップを行っています。

来春までの半年間は、富山でラボのセットアップをしつつ定期的に福岡に戻り(それ以外の時は電子メールやskypeなどで)九州大の学生の研究指導をしています。来春には富山での一期生となる四年生、九州大からは博士後期課程の学生を特別研究生として迎え、近隣研究分野で公募中のテニュアトラック助教とも連携して、富山での研究を開始することになります。来年度の一年間は福岡に残る修士学生がいるため、彼らの指導(実験設備の維持も含めて)も必要です。一年間ですが富山と福岡にラボを持つので、面倒な一方、貴重な経験であり恵まれた状況とも言えます。

夏から秋に変わる季節に富山に転任して感じる事は、気候の変化の速さです。転任した直後(10月上旬)は、フェーン現象で全国でもトップクラスの暑さを記録する日があった一方、後半になると気温は一気に下がり、足早に到来する北陸の冬の厳しさを予感させました。福岡から移った身としては、目前に迫った冬の暮らしは不安ですが、一方で厳しい気候のもたらす自然は、その不安を黙らせる「美しさの力」があります。転任の挨拶状の

返信に「富山は北海道、沖縄に次いで、自然豊かな県」と書いて下さった方がいましたが、必ずしもほめ過ぎではないでしょう。今の季節（11月中旬）、建物四階の研究室の窓からは、近景にはキャンパス内外の紅葉、遠景には雪化粧した雄大な立山連峰が一望できます。大きな寒暖の差がもたらす紅葉の鮮やかな色合いは、福岡の街中ではお目にかかれなかったものです。雲と雨が多い土地柄ですが、その分、晴れた時の空の高さと青さは、見上げる度に心が洗われます。

もともとグルメでない私は「富山の上手いモノ云々」を語る資格はないのですが、そんな私でも単純にわかったことは、（立山連峰を水源に持つ）富山の水の美味しさ。「きれいな水」「長い冬と曇天」。このキーワードから連想したRNAゆかりの土地は、コロラド州ボルダー。そう、リボザイムとしてRNAが新しい姿を世に見せた場所です。Tom Cechがリボザイムを発見した直後は、懐疑的な研究者から「リボザイムの実験はロッキーマウンテンの湧き水を使った時だけ上手く行く」というジョークも聞かれたとは、当時Cech研のポスドクだった井上丹先生（京大）の言葉。慣れ親しんだRNA分子も、新しい土地で「何か新しい姿を見せてくれるのでは？」と、（私の脳細胞側の活性化も含め）富山の水・自然・気候に密かに期待しています。

ラボを立ち上げるにあたって実験室や機器を整備することは重要ですし、楽しいのですが、何よりも新しい土地で新しく出会う（ラボに迎える）学生達に、「どうやってRNA研究の魅力を伝えるか」、そのことを9年前も、そして今回も考えています。工学系と理学系の違いはありますが、どちらの学科も講座の構成はオーソドックスな化学科であり、私の講義を受ける学生が4年に進級するまでは、生命科学系の講義や実習の経験がない学生を受け入れることになります。とくに来年度は出会う機会も限られた学生を、一期生として迎える事になります。

同じような状況だった9年前、着任して間もない頃に「バイオ分野の研究に興味があるので話を聞かせて欲しい」と一人の三年生が部屋を訪れてきました。その学生は九大の最初の卒研究生（二名）の一人となって、RNAの魅力に捉えられ博士課程まで進学し、九州での私のグループの研究を（後輩の指導も含め）支えてくれると同時に、本人自身もRNA研究を通じて大きく成長したと思います。あれから9年、ポジションも変わり年齢も増しましたが、「同じような学生が訪れてくれる、（そして成長してくれる）」ことを願いながら、迎え入れるラボのセットアップをしています。

RNA研究の魅力を伝えるために最も大事なことは、私自身がRNA研究の魅力に「囚われ続けている」事でしょう。最初に（大きな世界の一端を）伝える私の熱気が冷めていなければ、その熱が伝わった後は、「RNA自身の魅力」が「RNAワールドのように？」「RNAウィルスのように？」自己増殖して学生を虜にすることは、上で紹介した学生やその後輩達を含め、RNA学会に集う多くの方々が実証済みですから。